世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Reviewing after the theater show

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/612

武蔵野大学文学部創立五十周年記念作品

「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」劇場公開を終えて

土屋　忍

武蔵野大学文学部が創立五十周年を記念して製作した文学映画「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」が、劇場関係者の審査、判断を経て、二〇一六年三月に渋谷区宇田川町の映画館アップリンク・ファクトリーで公開された（アップリンクは、いわゆる渋谷の単館系のミニシアターのひとつである）。三日間で計四回の限定上映だったが、公開直前に事前予約の数が伸びたため、準備していた関係者席を急遽とりやめて一般席に変更した。最終日の二回の上映時には、さらに補助席を出して対応した。もともと収支に関しては、大学側が関わらないような契約を結んでいたが、劇場と配給に収益をもたらしたので、少なくとも興行的には成功裡に終えられたと言ってよいだろう。

一般社団法人日本映画製作者連盟の統計をみると、ここ十年に日本で公開された邦画の数は、一年間に四百本から六百本の間で推移している（最新の統計である二〇一五年は五八一本）。一年間につくられる映画の本数は八〇〇本以上と言われる。さらに大学や専門学校の授業、ワークショップなどで制作されてカウントされないものも含めると、一〇〇〇本程度になると言われる。つくられた映画のおよそ半数は映画館で上映されることがないままお蔵入りしてしまう、という状況を考えると、初めて製作した映画、それも文学映画が劇場で公開されたことは幸いであった。

「どうしたら、そういうことができるんですか?」という疑問や「その手がありましたか、でも簡単には真似

できないそうにないですね」といった感想が、学会で再会した他大学の研究者たちからは寄せられた。今日の国公市立大学は受験生の獲得に躍起になっており、その渦に巻き込まれていない大学の先生などほとんどいないようなご時世なので、そういう広報的な発想にもなるのだろう。なるほど、どうせ映像を撮るなら「武蔵野大学」というキャンパスを美しく映し、そこで過ごす「大学生」の生き生きとした姿を伝え、学ぶ対象としての「文学」を魅力的に描きたい、という思いが私の中にあったのは確かである。しかし、義務でも課題でもなく単位にもならない課外活動である映像製作に取り組む学生たちにとって、その動機が大学や学部のためであるわけはない。彼らの思いの中にあったのは、自分たちの文学ゼミを盛り上げて楽しみたいということであり、そのための手段が「外に出よう!」であったのだと思う。とはいえ、それぞれ予定があり「忙しい」はずである。どうしたら臨機応変に参加できるような場になるのだろうか……。試行錯誤である。

やがて撮影の現場が楽しくなり、楽しくなると集まる人の数も集う頻度も増えてくる。そうなると、私としても頭を捻らざるを得ない。単なるイベントに終らせることなくカタチにするにはどうしたらよいのだろうか、同じカタチにするにしても、みんなが満足できる最低限のクオリティを追求するにはどうしたらよいのだろうか、そのために最低限必要な先立つものをどのように工面すればよいのか……。頭を働かせてきたのは、広報の戦略や宣伝の効果ではなく、学内外で学ぶ際の教育と研究の方法と成果を表現する方法であった。大学の教室で学ぶ正規の文学ゼミにおける蠢動から広げていった渦の中で、学生たちは、ふだんの生活では享受できない学内外の協力を仰ぎながら、それぞれの持ち場で、ひとつの方向を見て共同で作品をつくるということにのめりこんでいった。そのとき私が感じていたのは映画の力である。そして、今あらためて想うのは、それを召喚した小谷組（小谷忠典監督の協力者たち）の力である。

完成した映画を上映した渋谷は、国木田独歩が「武蔵野」（原題は「今の武蔵野」）の想を得て執筆した地である。独歩の「武蔵野」は近代の風景文学と武蔵野文学の

原点とも言える作品なので、渋谷には当時の原風景が刻まれている。他方で今の渋谷は映画の街である。その地に、武蔵野を舞台にした新しい文学映画を引っさげて進出することになったのだがそれははまったくの偶然であった。二〇一四年春、立ち話の中で、二十分程度で学生たちの活動記録を撮影できるかどうか、学生たちの手になる映像がつくれるかどうか、映画監督の小谷忠典さんに相談したときには、まさか八十八分の「映画」になるとは、誰も思ってもいなかったのであるが、武蔵野における武蔵野の文学映画が今このときつくられる必然性がどこかにあったようにも感じられてくるのが不思議であった。

事の起こりは、ゼミ生による課外活動のひとつであった文学展示「西東京と紡ぐ文学」（市民広場におけるパネル展示）であり、そこに付随した二十分の記録映像であった。当初の予定を次々と更新し、極限まで増殖し、結果として大きなカタチを遺したこの共同プロジェクトは、主として、三つの要素から成立っている。

第一に、文学研究とその成果報告という側面である。研究活動としてみたとき、どれだけの成果を出せたのか、という点を検討しなければならない。第二に、文学映画としての側面である。公開して観衆を得た作品である以上、芸術面での完成度を問わなければならない。第三に、教育活動としての側面である。とりわけ第一と第二の点については、稿をあらためて詳細に検討したいと思う。ここでは、第三の点についてのみ簡単に記し、今後の課題を示しておく。

今あらためてふりかえるなら、文学研究とその成果報告しての映像記録は、映画製作というクリエイティブな共同作業を経て完成したのだが、その過程において学生たちは、意図せずしてアクティブ・ラーニングと長期インターンシップの実践を経験していたことになる。

授業としての単位とは関係のない自主的な活動であり、現地を訪問し市民と出会うことにより机上の研究（文字の世界）を問い直す視点を獲得しようと試みるという点では、かつて東京大学本郷キャンパスの教室でスタートした宇井純の自主講座（一九七〇年十月～）などの事例が思い浮かぶが、大学の解体という目的が念頭にない点で決定的に異なる。また、自主講座においては、

資本主義と結びつく現世利益的な手段と化した大学の知に対する批判、それを具体化した産学連携、媒介する学者への批判なども基底にあった。この点については、少なくとも教員である私の中で、まったく意識していなかったかと言えば嘘になる。すなわち、（学問研究の最前線において議論されてきた）近代の人文知の行き詰まりや知識偏重主義の弊害には賛同しながらも、負の遺産を強調するあまり功の側面を踏まえずその継承を怠り、産学連携と称して外部委託や外注（あるいはアウトソーシング）をあまりに安易に媒介する（つまり丸投げする）大学人や実務家教員には問題も感じざるを得ないのである。そして、学生を「顧客」とみなし会社化する昨今の大学の体質や、大学（生）という資源を活用したいという社会（人）の欲望を対象化し、それらを冷ややかに見る学生たちの眼差しが潜在することも日々感じている。アクティブ・ラーニングや長期インターンシップを兼ねたプロジェクトにおいては、大学生と触れ合うことを求める「職業人」の誠実さと不誠実さを学ぶ場にもなり得ることがわかった。このことは、今後、教育機関全体においてますます大きな課題となるであろう。

ともあれ、予想を超えて大きなプロジェクトに成長したこの企画に最初から関わってきた第十二期土屋ゼミ＋有志の学生たちが、二年間、キャンパス内で生き生きとした姿を見せて活動し、圧倒的な輝きを放って卒業していったのは間違いない。人生とは楽しんだ者勝ちである、とするならば、彼ら自身が責任主体として省みる必要はないだろう。しかし、残された者としてはそうはいくまい。今後、様々な角度から検証することが必要である。機器も設備もノウハウも必要性もなく、だからこそ成立したこのプロジェクトは、管見の限り先行事例をもたない（美大に近似する試みはあっても劇場公開のレベルには至っていないようだ）。未曾有の事態が進行した結果だという自覚が上映を終えてから事後的に芽生え、そうであればこそ、いろいろなことが未整理のまま、言語化できずにくすぶっている。不完全燃焼なのである。次号以降に、詳しい検討をおこないたいと思う。

最後に、以下、劇場公開までの広報活動の一部を備忘録的に略記しておきたい。

二〇一六年二月一日　チラシ・ポスター・チケット入稿。
二月五日　予告編・ＨＰ完成。事前予約開始。
二月八日　チラシ一五〇〇〇枚・ポスター二〇〇枚・チケット一〇〇〇枚が納品。
チラシの郵送開始。
チラシ・ポスター配布の開始（武蔵野キャンパス近辺の新町、関町からはじまり、田無、ひばりが丘、花小金井、三鷹、吉祥寺、武蔵境、立川、荻窪、明大前、下北沢、神保町、御茶ノ水…と練り歩き、「地回り班」の活動は粘り強く続けられた）
二月二十四日～二十六日　劇場用パンフレットの編集、校正（於：山中湖・ゼミ合宿）
三月四日　『タウン通信』の取材
三月七日　『タウン通信』にインタビュー記事が掲載
三月十一日　劇場用パンフレット納品
三月十二日　十九時半～「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」第一回上映
上映後「物語と音楽のハーモニー」（松本佳奈）
三月十四日　十九時半～「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」第二回上映
上映後「西東京と紡ぐ文学映画」（小谷忠典・土屋忍・山本恵司）
三月十六日　Ｊ－ｃｏｍ「デイリー・ニュース」に生出演（９名）
三月十七日　卒業式

三月二十一日十六時〜
「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」第三回上映
上映後「受け継がれる詩と想い」（藤村女子高等学校合唱部＋武蔵野大学）
十九時半〜
「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」第四回上映
上映後「初めての文学映画を語る」（小谷忠典・合田典彦・漆川由希子・R・エマート・菊地典明）

なお本号には、演出を担当された小谷忠典氏、音楽を担当された松本佳奈氏、配給を担当された大澤一生氏にエッセイをご寄稿いただいた。記して感謝します。

（つちや　しのぶ　武蔵野大学教授）